

鳶・土工 高野秀吉

建築の現場で仮設物の設置や鉄骨建方を担当する鳶工に対し、土木の現場には「鳶・土工」という専門職が存在する。「鉄筋と型枠以外はすべて」と言われるほど職域が広く、「職種の間を埋める」立ち回りの良さが求められる。まさに「現場の女房役」である。今回は、その若手職長に仕事ぶりを聞いた。

野球の道をあきらめ、土木の世界へ

鳶・土工の高野秀吉は、一九七七年、宮崎県の出身。高校時代は硬式野球部に所属し、正捕手として野球漬けの日々を送った。

「元々、ウチの高校は強豪校で、自分の代でもいい選手が集まったんです」

三年時に春夏連続甲子園出場。春はベスト8まで勝ち進み、チームメイトには卒業後にプロ入りした選手もいる。自身はその後、社会人野球の名門チームに入部したが、

「入った時に他の選手を見たら、体の大きさからして全然違う。『ああ、これは通用しない

な』って諦めてしまって。自ら限界の線を引かなければよかったと、今は思います」

退部後、高校時代の先輩の伝手を頼って現在の会社に就職した。

「はじめは僕の訛りがひどくて、言ってることが全然通じなくて(笑)。工事のことは何もわからないし、多くの道具や材料を覚えることだけで精一杯でした」

キャッチャーとしての視点を生かせる仕事

「鳶・土工」とは、土木工事において鉄筋・型枠以外のほぼ全ての作業を請け負う職種。特に今回の現場のような鉄道の地下化工事では、土留め杭、切梁、工事桁などの仮設物が多く、その資材の仮置きから設置・撤去まで、さらに重機を操作しての掘削やコンクリート打設なども手がける「何でも屋」のような役割だ。

「入った時から、『できるものは全部やれ』って教えられました。他の職種が作業していたら、『お前、ちょっと行って見て来い。どこかに自分の仕事に生かせるところがないか、見て学べ』

KEEP

守り、伝えること

仕事に線引きをせず、できることは全部やる。

職種にとられないのが鳶・土工



左/京急大師線連続立体交差の現場にて、的場猛所長(左)、小山大輔工事主任(右)と。インターンの学生も生き生きとしている。
中/既存の線路を桁化して、その下を掘削、躯体を構築する。この足場や土留め壁なども全て鳶・土工の仕事。
右/桁化された線路。この直下で、人知れず日々作業が続けられている。



現場のプロフェッショナル KEEP & CHANGE

と。だから自分の中では『鳶・土工の仕事はここからここまで』っていう境界はないですね」
高野が初めて現場に出る際、勤務先の社長にかけられた言葉が忘れられない。

「最初だから車で送ってくれたんですけど、

これも野球と同じだと思います」

笹子トンネルの事故現場に駆り出されて

二〇〇六年の着工から八年間、高野は「京急大師線連続立体交差事業」の現場に勤務しているが、途中で別の現場に急きょ呼び出されたことがある。二〇一二年末に発生した、笹子トンネルの天井板落下事故の復旧のためだ。

「現場としてはもちろん出たくなかったけど、非常事態だし、彼にはガッツもあるので行ってもらいました。あの時は各地の現場から、本当に気が利いて自ら動ける人だけが選ばれたので、それはそれですごいこと。反対車線の復旧をやる時にまた来てくれって言われたくらいですから」

と、大林組・的場猛所長は当時を振り返る。
高野自身にとっても貴重な経験だったようで、「二カ月くらいあの現場にいて思ったのは、百人、二百人って集まって、道路を開通させるためにみんなが同じ方向を向いてやれば、すごく大きな力が出るんだなということ。チームワークの大切さを改めて感じました」

「スーパー職長」の恩返し

下積み時代を経て、現在は十人以上の作業員を束ねる職長となった高野。今年は大林組の建

その時に『この仕事は野球と一緒だ。キャッチャーやってたんなら、ここでも同じことをやればできる』と。視野を広く持つて全体を見渡すという点では、キャッチャーの経験が生きています。あとはチームワークが大事ということ。

設現場で働く職長のうち、特に優秀な建設技能者として認定される「スーパー職長（大林組認定基幹職長）」に選ばれた。

「自分は人との出会いに恵まれています。信頼してくれる所長、自分を雇ってくれた社長……。その人たちの期待に応える意味でも、事故なく、より良いモノをつくることが自分にできる恩返しです。スーパー職長に選ばれたこともあり、これまで以上に気を引き締めないといけません」

「やれば絶対楽しい仕事なんで、若い人にも入ってきてほしいですね。向いていると思うのは、いい意味でのマイナス思考を持つ人。失敗することを想像できれば、成功するように工夫し、新しい知恵を生み出せる可能性があるからです」

CHANGE

応じ、変えること

「何でも屋の鳶・土工に向いているのは、
いい意味でのマイナス思考を持つ人」

左/“キャッチャー”の視野の広さで、自分たちだけでなく他の業種の仕事もしっかり見て、改善点は現場全体で直していく。
右/解体した切梁などの資材をクレーンで吊り上げる。こうした重機を用いた玉掛作業も鳶・土工ならお手の物。



たかの・ひでよし◎1977(昭和52)年、宮崎県生まれ。社会人野球を退部後、兄の同級生の紹介で鉄道・路線駅の改良工事を主業とする小林工務店に入社。首都圏を中心に、数々の鉄道・トンネル工事を経験、笹子トンネルの事故復旧工事にも従事した。本年、スーパー職長(大林組認定基幹職長)に選出。